

第206回くらしの植物苑観察会 2016年5月28日(土)

## -古代王権と植物-

松木 武彦(当館考古研究系 教授)

古代王権と植物の関係について明確なことを述べるのは、実は簡単ではない。なぜならば、植物は、考古学が対象とする物的証拠としては残りにくく、また、動物に比べると、象徴化されて絵画や彫塑などに表現されることがきわめて少ないからである。しかし、実はその後者の点に、古代王権の歴史的特質が反映されているともいえるだろう。

王権とは、政治的支配の主体である。とはいえ、共同体に対する強制という上からの力だけで成立するものでは決してない。共同体からの同意や是認という下からの力によって初めて、政治的権威は存在しうる。その同意や是認を得る手段として用いられるのが、権威のシンボリズムである。

シンボリズムとは、一種の「なぞらえ」ともいえる。世界史的に見て、同意や是認を与えるべき王権を、自分たちを超えた強大な力の主体として演出する際、そのなぞらえの対象として選ばれるのは、古代王権の場合圧倒的な頻度で動物であり、植物は稀である。古代王権と植物とが容易に結びつきにくい理由は、この点にある。たとえば古代エジプトの支配者ファラオの権威は、ハヤブサ(ホルス神)やオオカミ(セト神)など、猛禽や猛獣のシンボリズムと結びついて演出された。中米の古代文明のジャガーも著名であるし、中国では、想像上の動物ではあるが龍が皇帝のシンボルとなった。

このように、古代王権の成立と発展を考えると、精悍で勇ましく猛々しい動物のシンボリズムが果たした役割は、きわめて普遍的かつ重要である。それは、力・戦い・勝利といった、古代において共同体から王権に託されるべきものとして好ましい性質を喚起させるからであり、おそらく古代の王権の成立には、そのような社会的認知が大きな役割を果たしたのであろう。この点で、日本の古代王権に動物のイメージが希薄であることは注目に値する。日本列島全体を代表する最古の王権(大和王権)から、それを受け継いだ律令国家の王権に深く関連する象徴的器物に、動物の要素はほとんど認められないのである。

日本列島先史時代の宗教的世界観を具象的に表した最古の器物は、絵画が描かれた銅鐸で、弥生時代中期(紀元前1~2世紀)の所産である。その代表例である「伝香川出土銅鐸」と「桜が丘4号銅鐸」(兵庫県)の絵画については従来さまざまな解釈があったが、水を張った田の諸情景を描いたものであり、水稻農耕の祭りに用いられたことは疑いない。古墳時代になると、大阪府小阪合遺跡などで前期(紀元後3~4世紀)の祭りの跡が知られている。古墳の副葬品と同じラインナップの器物を、用水の水辺に奉納したものである。このような用水の祭式は5世紀には定型化され、王や各地の有力者がつかさどる祭祀として全国に広まり(笹生衛 2015『神と死者の考古学 古代の祭りと信仰』吉川弘文館)、彼ら彼女ら自体も同様の祭式をもって古墳に葬られた。

そこに立てられた埴輪や有力者の居宅の分析から、彼ら彼女らの社会的職能は、軍事などよりも、水稲農耕を成功に導く用水の管理と支配に中心が置かれていたことが明確になりつつある（若狭徹 2015『東国から読み解く古墳時代』吉川弘文館）。

以上のような古墳時代の王権も、その成長の末に成立した律令国家の王権も、世界の「古代」王権の中ではきわめて珍しいほど、動物のシンボリズムの形跡は薄い。このことは、日本列島の王権は、動物の獰猛さや精悍さに象徴される軍事的成功や領土征服の結果として成立した側面が至極希薄であることとしると同時に、今述べたように農業生産の発展を基盤として伸張したことの反映とみてよい。

付言すれば、世界史的に見て、植物のシンボリズムと結びつきがちなのは中世の王権である。枝を伸ばして根を張る植物のイメージが、王統や王家の血統の繁栄への希求と重なるからと考えられる。「植物>動物」というシンボリズムの比重に着目すると、日本列島の古墳時代から律令国家にかけての王権は「古代」的ではなくむしろ「中世」的であり、このことは、今後の世界史的評価の再考にも一つのヒントを与えよう。

.....

**次回予告** 第207回くらしの植物苑観察会 2016年6月25日(土)  
 「盆行事にもちいる植物」 山田 慎也 (当館民俗研究系・准教授)  
 13:30~15:30(予定) 苑内休憩所集合 申込不要